

佳作

水都を受けつぐぼくたち

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 一年 北田 新

ぼくの住む徳島市には、大小百三十四の川がある。家から学校までは、新町川と助任川を渡り、学校の北側には、四国三郎と呼ばれる吉野川が流れている。どこへ出かけるにも橋を渡ることになる。橋の上から、ボラやチヌ、クラゲやカニなどの生き物を探るのが、小さなころからのぼくの密かな楽しみだ。探していると、時間が経つのも忘れてしまう。

もう一つの楽しみは、新町川を走る遊覧船「ひょうたん島クルーズ」だ。潮がたっぷり満ちていると、特別コースとして末広大橋の方まで船を走らせてくれる。風を切って走る船から見る県庁や四季折々の眉山の姿は、自慢の景色だ。

「新町川は、水がきれいで気持ちがいいなあ」と、祖父に言うと「昔は、汚れて川のそばを通るときは、鼻をつまんで急ぎ足だったんですよ」と話してくれた。ぼくは、信じられなくて「NPO法人新町川を守る会」のホームページを開いてみた。新町川を守る会は、平成二年に活動を開始し、月二回ほど川の清掃活動や、ひょうたん島クルーズの運行などを行っている。「昔はヘドロと家庭ゴミだらけで、TVカメラで撮ってもゴミしか映らないと言われた。昭和四十年の阿波踊りのときには川の周りに消臭剤をまいていた。」らしい。このままではいけないと、十人余りの人たちが清掃を始めたが、なかなか理解を得られず苦労したそうだ。COD三十パーツ・パー・ミリオンだった水質が、今は、アユやサケが棲める水準三パーツ・パー・ミリオンにまで回復し、ヒラメやアカエイ、さらにウナギも生息するまでになっているそうだ。そして、きれいになった川を生かそうと、ひょうたん島クルーズが始まった。昔は、ヘドロで悪臭が漂い、嫌われていた川が、「水都とくしま」の観光の目玉となっている。

きれいな川が身近にあり、当たり前のように魚を見つけて喜び、クルーズを楽しんできたぼくだったが、汚れた川の昔の様子を知り、川は人

間が守っていかなければならないことに気づかされた。川に対する人々の無関心さが川の汚染を招いたのだ。新町川は、工場の排水や家庭の汚水が流れ込み、死にかけていたのだ。これでは魚も棲めない。どうせ汚いのだからゴミも捨ててやれという人もいたに違いない。水都だからこそ、きれいな川を守る努力を続けていかなければと思う。

ぼくがもう一つ無関心だったのが、水の使い方だ。徳島県は、吉野川、勝浦川、那賀川など、水量の豊富な河川が多数流れ出しており、豊かな水資源がもたらされている。夏に水不足が続く、取水制限が出されるニュースが流れても、徳島市では困ったことがない。節水を心がけていても、歯みがきの水の出しっぱなし、シャワーの無駄使いなど、いつの間にか忘れてしまっている。当たり前のことがいつまでも続くわけがないのだ。

川のはじまりを探ると、山の斜面からの湧き水が集まり、小さなせせらぎをつくっていく。植物の茂った森林は、水分をたっぷりたくわえた「緑のダム」といえる。自然の恵みに甘えるのではなく、自然を守り、めぐる水の有効な利用の仕方を、もっと真剣に考えなくてはいけないと思う。そして、水の利用にあたっては、使った水の行き先まで考えることが大切だと気付いた。

ぼくは、「水都とくしま」に住んでいることが、うれしくなってきた。豊富な水に恵まれ、水際公園があり、クルーズやサップのできる川と共に住み続けるには、川をきれいに守っていく努力が必要だ。川を清掃するボランティアに参加してみたい。それと共に水を有効に使い、常日頃から、節水に心がけたいと思う。きれいな川に親しみ、触れ合い、水を大切にするみんなが住める水都とくしまでありたいと思う。クルーズから見える景色を何十年先まで楽しめるようにしていきたい。